

歴史ある商店街の変遷と業種構成-錦市場を事例に-

3 回生 中村正夫

1. はじめに

京都市内には商店街が多く存在する。とりわけ、歴史的な商店街の代表格として錦市場が挙げられる。井村（2007）によれば、錦市場が活況を再び取り戻している背景には、老舗中心の地元組織が新規店を制約する独自の「錦ブランド」を醸成しているという。また、近藤（2006）によれば、錦市場は京都市の市街地に位置しながらも伝統的な「京町屋」も保存されているらしく、他の商店街にない現代的な景観と歴史的景観という対照性も有しているといえよう。

表1は近年10年間で市が行ったアンケート調査結果のトップ25に入る観光地のうち、上から10位ないし11位および回答率を示した。一方でこれによると、外国人観光客の訪問先として金閣寺や清水寺など代表的な観光地に並びトップ10内に唯一商店街で入る回答を得ていることもうかがえる。特に、2007年から2010年にかけて錦市場商店街は全く回答されていないにもかかわらず、2011年以降は2014年を除きトップ10位もしくは11位に位置していることが読み取れる。したがって、近年はなんらかの理由で外国人観光客に錦市場の認知度が高まっていることの表れではなかろうかと予測する。この点は、井村（2009）も観光客向けの新規参入店舗により観光地化しつつあるという指摘する。また、京都市内の商店街の事例として、2006年に中小企業庁により『がんばる商店街77選』のにぎわいあふれる商店街部門に挙げられ評価されている点に着目した。これによれば、「錦賑わいプロジェクト」と名付け①商標登録による保護②イタリア料理と錦の地物料理の交流イベント③テナントミックスの3点を中心に推進しているようである。以上の点と、井村（2012）も『がんばる商店街77選』に着目し調査していることに注目し、今回の現地調査先として錦市場商店街を選んだ。

パンフレット『錦のご案内』（パンフレット①とする）および、ホームページの錦市場の歴史などによる中京区富小路通に位置する錦市場商店街には、東西に走る錦小路通の直線上約400mにおよそ130店舗が立ち並んでいる（以下では『錦市場』と呼ぶ）。錦市場は通称『錦』とも呼ばれ、別名『京の台所』で多くの京都市民や周辺住民にも知られる。その所以は、現在に至るまで約400年もの歴史を経て形成された、歴史的な商店街の一つであると説明されている。錦市場が位置する『錦小路通』という名称は、桓武の平安時代に遡る。四条通の北の小路で、四条大宮から寺町通に位置し具足（靴）を売る店が立ち並んでいたことに起源がある。時の1054年に「帝の命」により織物の綾織・錦織にちなみ南の綾小路と並ぶようにと、『錦小路』と言う名に改められたというものである。

商店街の具体的な事例を取り上げた論文としては、釧路市の新橋大通り商店街を事例に大規模小売店の立地と中心商業地の変化を述べた根田（1989）や、富山市の商業地域の多極化と商店街経営者の意識格差の関連を述べた五十嵐（1996）など、主に地方中核都市を事例として取り上げるものが多い。しかしながら、その事例の商店街の多くは衰退が見られる都市であり、いかにして活性化させるかという解決策を論じるものが多いことは否めない。一方で、錦市場を事例に取り上げる研究もある程度はある。そこで、上にあげた論文などを参考にしながら、本稿ではまず地方大都市の県庁所在地である京都市内全体の商業動向を踏まえる。なお、井村は何本か錦市場に関する論文を発表している。中でも井村（2012）の研究視点は異なるものの、同様に維持されている歴史的商店街として錦市場を調査している点で、最も参考になる論文であると思われる。また、新は著書『商店街はなぜ減びるのか』（2012）で「あたかも、商店街の最大の売りが『古さ』や『伝統』であるかのようだ。」「…商店街はまったく伝統的な存在ではない。」など社会情勢から商店街の衰退を論じている。果たして商店街には伝統が求められていないのか。合わせて彼の主張への反論も試みたい。その上で、20年間という期間内で錦市場商店街の店舗および周辺の土地の変遷とその景観変化を遂げつつもどの程度空間の維持がなされているのか分析、研究する。さらに、先に述べたように錦市場は近年外国人観光客錦市場に注目されつつあるという予測、さらにはその要因も確かめてみたい。また、調査方法として住宅地図の比較、ヒアリングと調査定点観測を用いることとする。

表1 2016年以前の過去10年間における外国人観光客の観光先回答事例とその割合

順位	2016		2015		2014		2013		2012	
	観光先	回答割合(%)	観光先	回答割合(%)	観光先	回答割合(%)	観光先	回答割合(%)	観光先	回答割合(%)
1	清水寺	67.7	清水寺	65.0	清水寺	64.4	清水寺	61.0	清水寺	68.4
2	二条城	50.9	金閣寺	57.3	金閣寺	54.0	金閣寺	54.5	金閣寺	57.7
3	祇園	50.5	二条城	49.9	二条城	47.4	二条城	49.2	二条城	37.9
4	金閣寺	49.5	祇園	49.1	伏見稲荷大社	35.8	京都御所	32.3	銀閣寺	32.7
5	伏見稲荷大社	43.3	伏見稲荷大社	41.4	嵐山・嵯峨野	32.5	銀閣寺	30.4	京都御所	26.0
6	京都駅周辺	35.8	京都駅周辺	39.4	ギオンコーナー	31.3	嵐山・嵯峨野	27.9	錦市場	24.0
7	嵐山・嵯峨野	31.2	嵐山・嵯峨野	33.0	銀閣寺	30.3	錦市場	27.1	嵐山・嵯峨野	23.5
8	ギオンコーナー	27.7	*京都御所	29.9	京都御所	27.2	伏見稲荷大社	26.4	伏見稲荷大社	22.0
9	*銀閣寺	25.4	*ギオンコーナー	29.9	八坂神社	22.3	*八坂神社	17.7	西陣織会館	19.8
10	*錦市場	25.4	銀閣寺	28.8	龍安寺	14.8	*ギオンコーナー	17.7	ギオンコーナー	18.5
11	京都御所	23.0	錦市場	27.8	平安神宮	13.5%	龍安寺	15.1%	八坂神社	17.9%
			2010		2009		2008		2007	
順位	観光先	回答割合(%)	観光先	回答割合(%)	観光先	回答割合(%)	観光先	回答割合(%)	観光先	回答割合(%)
1	清水寺	63.6	清水寺	21.0	清水寺	21.1	清水寺	20.4	清水寺	21.2
2	金閣寺	54.2	嵐山	16.1	嵐山	15.7	嵐山	16.2	嵐山	15.9
3	二条城	36.9	金閣寺	11.3	金閣寺	11.8	金閣寺	11.4	金閣寺	12.0
4	銀閣寺	26.2	二条城	9.0	銀閣寺	9.0	銀閣寺	9.4	銀閣寺	9.7
5	京都御所	24.9	銀閣寺	8.9	南禅寺	8.5	南禅寺	9.0	南禅寺	9.5
6	嵐山・嵯峨野	24.7	南禅寺	8.4	二条城	7.5	八坂神社	7.2	高台寺	7.2
7	平安神宮	19.3	八坂神社	7.7	八坂神社	7.1	高台寺	7.0	八坂神社	7.0
8	錦市場	19.0	高台寺	6.7	高台寺	6.8	二条城	6.8	二条城	6.7
9	八坂神社	16.2	平安神宮	6.0	嵯峨野	6.0	嵯峨野	6.3	嵯峨野	6.4
10	龍安寺	15.8	嵯峨野	5.6	平安神宮	5.7	鞍馬・貴船	6.2	鞍馬・貴船	6.1

(京都統合観光調査2007-2016より作成)

*本アンケートは2,000人前後を対象に、複数回答可の調査で、項目の割合は計100%にならない。

*表中にある項目“観光先”の*は各年の同順位であったことを表している。(2016年, 2015年および2013年)

*2014年度や2010年以前には錦市場がトップ25に入っていない。

*ギオンコーナーとは弥栄会館ギオンコーナーであり、京舞など日本の伝統芸能を鑑賞・体験できる施設である。

2. 錦市場商店街の特徴

1) 商店街区別の分布

中京区の一つ目の特徴は、中心市街地に含まれることが下の図1から読み取れる。というのも、商店街が京都駅周辺（南区）から、下京区や中京区にかけて多数分布しているのである。これら3区の境界線付近（星印あり青丸）を北部商店群、南区と下京区（下の青丸）を南部商店群と仮定する。これら2つの商店群で比較すると北部商店街群ではおよそ10の商店街が、南部商店街群では7の商店街が分布している。このことから、前者の範囲に多く分布し(錦市場は北方の集中地区に位置する)、商店街は中京区・下京区・東山区・南区の4つの区境界線に沿ってコのじ字に商店街が集まっていることが考えられる。次項では、この錦市場の組合について述べる。



図1 京都市内の商店街分布図および集中地区
(各商店街 HP を参照し GIS で作成)

2) 商店街振興組合と取り組み

錦市場は前章1で述べたように、由緒ある歴史的な商店街と言われており中京区富小路上る西大文字町609番地に位置している。図2は、錦市場が位置する中京区の約1.2km四方に

おける商店街の地理的な位置と錦市場の大まかな範囲を示した。これより、錦市場周辺は烏丸通と四条通りの大通りに挟まれた区域にあたり、10もの商店街が図1上ではほぼN字型に分布している。現地を訪れると、錦市場を含めてアーケード商店街が連なり、寺町京極商店街など隣接する商店街にも容易に移動できる点も特徴的で、現地を訪れた9月4日から7日にかけて昼から夕方などにレンタル浴衣を着た姿の若者なども見られた。さらに、雨や雪などの悪天候時にも訪れることができる。これらの分布からも、錦市場の特徴は、一つの商業的な地区を担っていることが考えられる。また、錦市場は東西方向に細長く、前述の通り錦小路通に沿って全長約400mという比較的狭い商店街である。

表2は錦市場商店街振興組合について、事務局長の是永氏へのききとりと入手したパンフレットなどを参考、改変を加えて組合の概要をまとめたものである。錦市場には、商店街店主を中心に出资者も含めて131名からなる錦市場商店街組合が存在する。組合は、商店街振興組合法*が施行された翌1963年に設立された。現組合に至るまでは、錦盛会(生鮮食品店舗)→錦栄会→錦市場商店街という変遷をたどっている。なお、初期の錦盛会は現在も存在しており氏からの聞き取りの際に短時間説明をしていただいた。加盟店舗は何店舗か廃業しているが100年以上に渡り経営を行ってきた店舗からなる組織のようである。

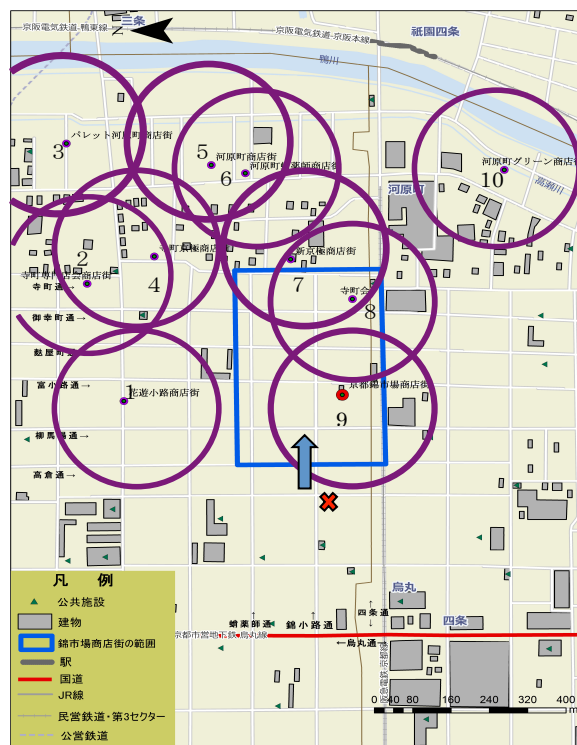


図2 錦市場商店街の地理的位置との範囲
(各商店街HPで位置を把握しGISなどで作成)

- * 円は直径約300m圏内の範囲を、数字は商店街の数を示す。
- * 商店街の位置は、組合または範囲内の店舗の位置を示す。
- * 青い上矢印は正面入り口の方向を、赤い×印は定点観測地点を示す。

表2 錦市場商店街の概要

組合名称	錦市場商店街振興組合
所在地	京都府中京区富小路市場上る西大文字町 609 番地
設立	1963 年 8 月 1 日 ~
街区構成	直線で全長約 390m、道幅 3.2m(一部 5m 強)
組織 (出資者含む)	組合員数 131 名/組合員店舗数 129 店
運営	組合費 2,000 円均等 利用料 共同井水*基本料および使用料 共同駐車場使用料 アーケード管理収入 など
開・閉店時間	おおよそ午前 10 時~午後6時の間
来街客の ピークタイム*	昼頃~夕方 18 時頃(昼は主婦が多い)
一斉休日	日・月・火・水を自由に設定

(①錦のご案内のパンフレットを改変)

* 共同井水やピークタイムについては是永氏の聞き取り調査により得られた。

下の写真1は、是永氏から得られたピークタイム内で撮影した写真で、図3は錦市場の錦小路通の出入り口から定点観測を行なった結果を示した。なお、定点観測地は図1に示してある。現地では1時間帯ごとに同観測地点で10分×3回の観測をおこなった。観測結果から客数は変動があるものの、外国人観光客比率は3割前後で推移していることが見てとれる。



写真1 錦市場の賑わい
(現地にて昼間に撮影)

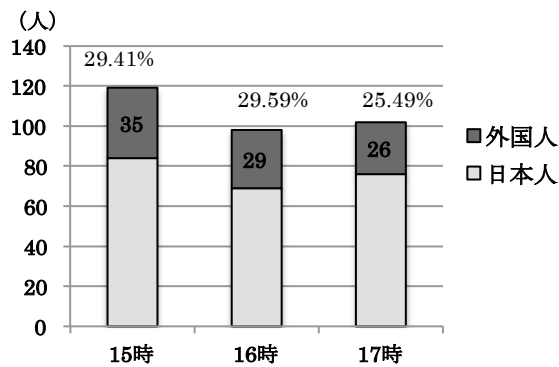


図3 1時間帯ごとのと外国人比率
(定点観測を基に作成)

2)中京区における錦市場の位置・統計的特性

図4は、中京区における同規模の店舗数を持つ商店街を5つ挙げ、各商店街の店舗業種の特徴を錦市場と比較したものである。京都府および市で最大の店舗数を持つ三条会商店街ではあるが、16店舗(8.5%)と少なく、錦市場では、31店舗の生鮮食品が約4分の1(24.2%)を占め、関連する加工食品や漬物屋などが上位に位置することが読み取れる。他の商店街では、ほぼ衣類販売、飲食店や雑貨店などであり、生鮮食品関連の店舗はうかがえない傾向がある。以上の考察から、錦市場は2つ目に生鮮食品など専門店を売りにする店舗に特化していることが考えられる。

一方の表2は、2014年の経産省商業統計を基に改変し作成したものである。この表から、まず錦市場には大規模小売店舗が所在しないことが確認できる。他方で、商店街内店舗数が最大の四条大宮を除き、ホームページが確認できた商店街では最も1店舗あたりの売り場面積は小さいことが読み取れる。そのために店舗面積構成比は高くない。近藤(2006)は、町家(京町家)の保存率6割以上の要因を町家建て替え工事を免れることが多いためと解釈している。これらを考慮すると、3つ目は保存された伝統的町家のため間口が狭く長方形型の店舗が多いと言える。

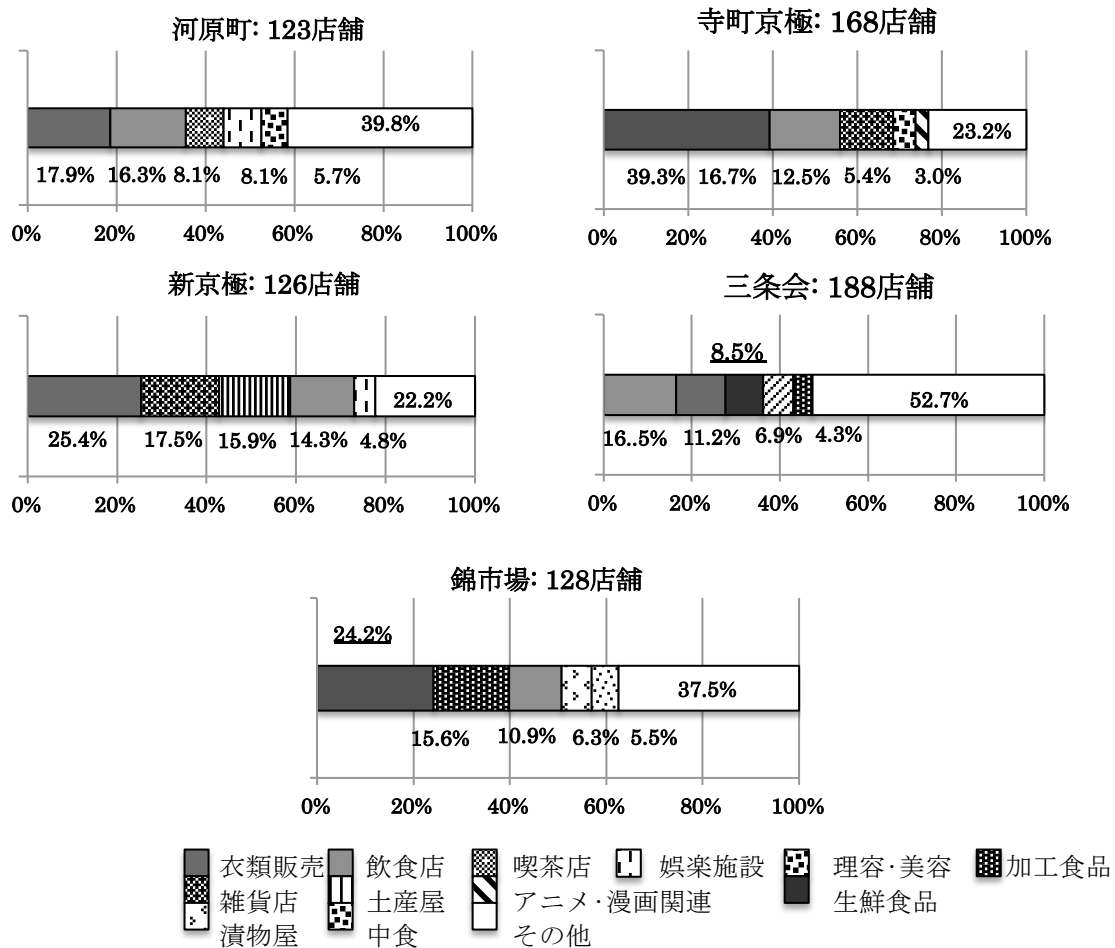


図4 中京区における同規模以上の商店街と錦市場の業態別店舗構成 (商店街HPから店舗数を計上、業種別に分類し作成)

表2 錦市場の統計からみた特性

振興組合名	大規模小売店舗*内事業所数(カ所)	面積構成比(%)	1店舗あたり(m ² /店舗)*
京都三条会	1	8.31	32.5
三専会	0	0.51	-
壬生京都会	0	1.03	-
西新道錦会	0	2.13	-
天神御旅	0	2.03	-
えんえんタウン	1	6.78	-
丸太町サービス	0	0.40	-
朱雀二条	0	2.57	-
夷川会	0	3.57	-
寺町会	0	2.40	45.2
二条繁栄会・京寺町会	0	1.84	58.8
寺町専門店	0	2.33	27.6
河原町バレット	4	4.00	54.4
三条名店街	1	4.72	48.1
新京極・寺町京極	2	20.07	105.2
河原町	38	10.04	59.9
花遊小路	2	2.26	^
錦市場	0	5.50	31.5
三条小橋	0	1.54	^
二条会	0	0.97	^
本屋町共栄会	0	0.29	^
四条大宮	0	0.52	2.8
西四条	0	0.43	^
上木屋町会	0	0.19	^
河原町御所表繁栄会	5	2.42	^
河原町蛸薬師	10	8.83	^
堀川丸太町-烏丸丸太町	0	1.57	^
ZEST御池	0	2.29	^
合計	64	100	

*統計上、中央区における商店街数は28となる。 *大規模小売店舗とは、1000㎡以上の店舗を指す。
 *全店舗面積の合計は72,389㎡となる。 *HPの確認できた商店街数で売り場面積を割った。

(2014年商業統計調査を改変)

3. 錦市場の変遷と支援

1) 錦市場の店舗図(現在)と20年間の商店図の比較分析

錦市場についての変遷を調査した井村(2012)によれば、商店街の外への退出(移転)をせずに錦市場内にとどまる事例も見られることも参考にしたい。図1は錦市場ホームページの店舗紹介とゼンリン住宅地図を参考にエクセルで作成した。なお、バツ印は生鮮店舗の廃業を、黒星印は外国人観光客や外国語表記が店内のpopやお品書きなどが散見された店舗を示す。アスタリスクは賃貸物件などであるため店舗数に含めない。まずは現地調査での店舗の様子・ヒアリング調査によって、現地調査後に住宅地図で過去に遡って検討した。まず、生鮮食品以外にも20年間ほぼ変わらず維持されているという予想に反して、10年間で検討したところ新規店舗の出入りが見られた。図5の東端の寺町通~御幸町通と西端の堺町通~高倉通にかけて多く見られ、生鮮食品店舗が少ないエリアになる。次に生鮮食品に着目してみる。錦市場や井村による錦市場ホームページおよび、2)の聞き取り調査からも、新規店舗の出入りがほぼ見られない生鮮食品の店舗は約70~100年を超える老舗であることが確認できる。他方、是永氏から錦市場周辺では近年マンションやビルなど、高層建築が目立ち始めたというお話も聞くこともできた。図6は組合事務所での聞き取り調査後に撮影したものである。写真のような高層マンション及び高層ビルが実際に歩いて回ると多くのマンションがひしめいて立地する景観になりつつあることや現に、組合事務所の隣でマンションの工事が行われていることなど今回の現地調査で得られ

た新たな現状も聞かせていただいた。以上のことから、4つ目に錦市場で創業70年以上を超える老舗生鮮店舗は現在もほとんど立地上では変わることなく維持されていることが考えられる。このことは外国人観光客や常連客などにより長く親しまれていることの裏付けである。次に、現地で実際に聞き取り調査によりあげられた意見などをもとに経営者側の視点での錦市場を検討する。

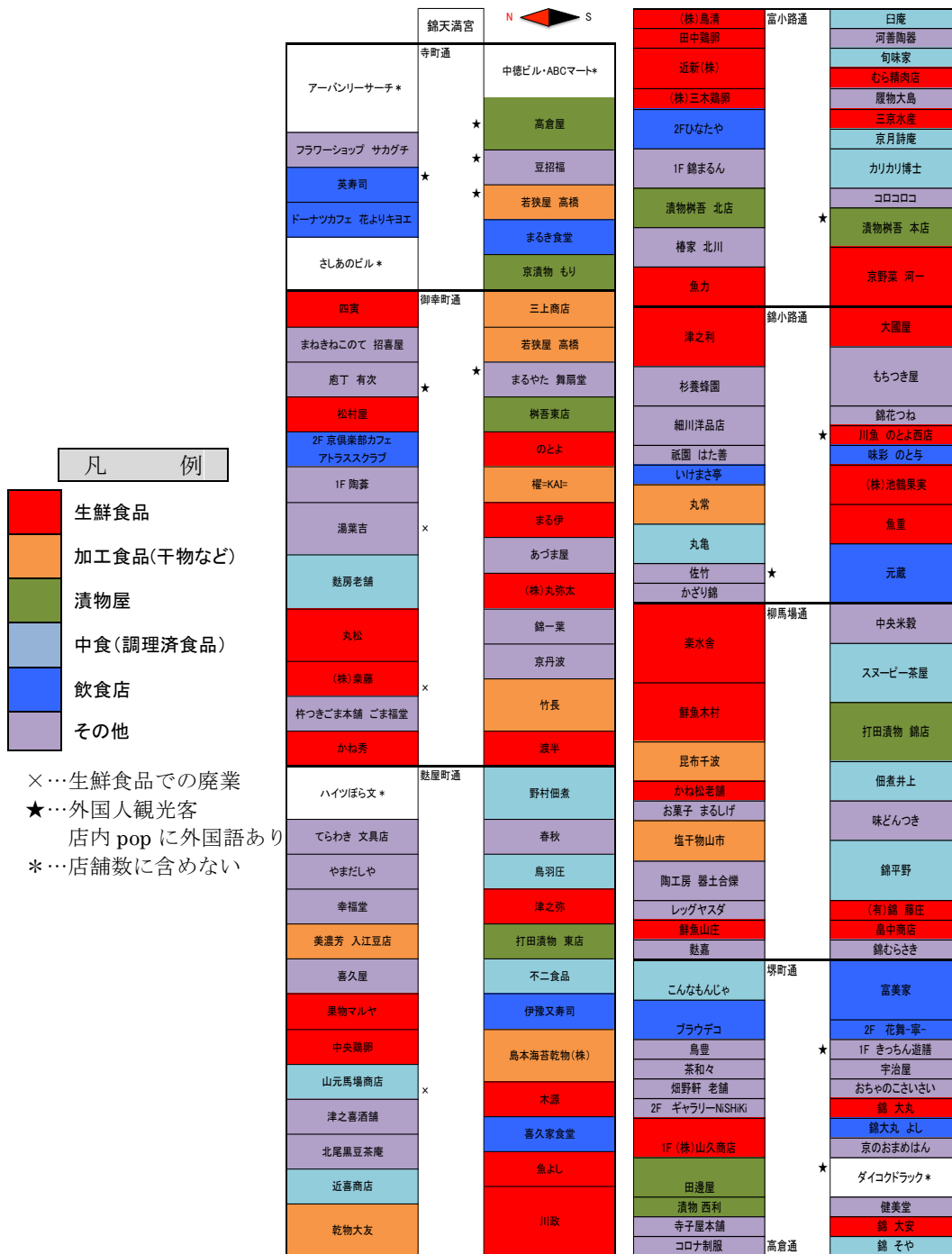


図5 2017年現在の店舗図
(2017年京都市住宅地図およびHP内の店舗図を参考に作成)



写真2 錦市場周辺の高層建築
(現地で撮影)

2) 経営者意識と錦の変容

1) では店舗の変遷を検討したが、次は経営者の意識下ではどう捉えられているかを明確にするため、現地調査に臨んだ。その結果が下の表3である。店舗A・Bは100年以上勤続の老舗であり、府から表彰を受けている。(店舗紹介ページ参照) 店舗Cは3区画に展開しており、Dは当日に時間を頂いた。聞き取り項目から、有意な回答であると思われる質問を「最近20年前後で変化したと思われることは何か？」に設定した。

いずれの店主も回答された近年の外国人観光客の客層の変化があることは統計調査などでも傾向が認められる。「老舗以外の店舗の入れ替わりが多い。」「生鮮食品業の廃業も少ない。」「靴のチェーン店の立地に伴う買い物客の変化がある」というA、BおよびDの否定的意見もあるが、反対に漬物屋が立ち並ぶようになった。」というCの肯定的意見も挙がった。他方で、是永氏、山田氏や河村氏などからも共通して風俗の乱れがあるという批判も印象的であった。それは、串焼きなどの食べ歩き方式(試食)やキャラクター商品を扱う新規店舗が錦市場内へ参入しているに起因するというものであった。しかし、デメリットばかりではない。飲食店のみならず、生鮮食品店でも店舗内で飲食できるイートインスペースを設けており休憩したい買い物客や観光客には大変便利であるといえよう。このような現状は、井村(2009)の言葉を借ると、店舗の多角化と観光地化の要因であると言える。なお、Bによれば外国語への対応は観光客の増加に伴い



写真3 外国語表記のある店舗
(某店舗にて現地で撮影)

始まったようで、店員が各店舗で行なっているという。以上から、5つ目に店舗によりは外国語対応を行なっているという特徴がうかがえる。

表3 店主の変化に対する意識

業種分類	聞き取り先*	勤続年数(創業時期)	質問*への回答
生鮮食品	店主A	100年以上(明治)	「特に中国人観光客が増えた。」
	店主B	100年以上(江戸後期)	「常に近隣店舗は入れ替わっている。」
漬物屋	店主C	約80年(昭和)	「漬物屋が多くなった。」
その他	店主D	約60年(昭和)	「履物関連の店舗が減ってしまった。」

(聞き取り調査を基に作成)

*いずれも外国人観光客の増加、店舗の入れ替わりについて言及、

*D以外は錦の生鮮食品についても言及された。

*有意と思われる質問:最近20年前後で変化したと思われることは何か?

3) 京都市および府の支援

支援策について、市庁の京都市産業観光局商業振興課の山田俊介氏および河村信一氏の二人への聞き取り調査によれば、市庁と府庁は管轄範囲の差であるであるという。(ほぼ商店街創生センターと類似)では、どのような活動を行なっているのか。創生センターHPによると①各商店街のカルテ②商店街の活性化支援③支援組織・人材サポート④インバウンド観光の環境整備⑤商店街の発信強化が活動とされている。河村氏からは、特に③と⑤についての話を伺えた。京都市庁は商店街をⅠ:観光地型(嵐山など)からⅡ:都心型、Ⅲ:地域住民型に区分し、中でもⅢを中心に支援を行なう。この活性化のため、主に3本柱(資金面・ハード面・ソフト面)に基づき活動としており、また店主および出展者の募集も行われる。⑤ではHPを作成・更新、実際に商店街の見学会なども行うようであるが、特に錦市場ではテナントミックス*の取り組みが行われ、伝統的とも言うべき生鮮食品の店舗に限り出店を限定している。しかしながら、土産屋の出店や先述の食べ歩きも含め、錦文化が乱されつつあることは今後改善されるべきであると思われる。

*テナントミックス:商店街の業態の合わない店舗の出店を排除すること。(錦ブランドを活かした取組の資料より)

4. おわりに

これまで3章にわたって錦市場という一商店街を分析したが、今回の京都実習で得られた見知は以下の通りである。1点目は、錦市場は大通りに挟まれた区域に所在し、周辺に10もの商店街が分布する中京区における商業的な地区の一つである。2点目は、生鮮食品関連の店舗構成約24%と比較的多いことである。加えて、彼ら経営者は錦市場というブランドに誇りをもちながら経営を行っていることが伺えた。3点目は、店舗面積が比較的小さいことから細長く間口の狭い店舗が立ち並んでいることである。4点目は、錦市場は過去20年間を考慮するとやはり生鮮食品はほぼ衰退（閉店）することなく現在も勤続され続けていることである。それは、錦栄会という生鮮食の組合店舗は100年以上の老舗が多いことにも表れている。5点目は、市内及び県内の商店街は近年増加している外国人観光客へのインバウンド対策として、店舗自らがPOPやお品書きなどの言語対応（英語や中国語など）を行うことも一部ではあるが確認できた。さらに今後はこの対策は必要となるであろう。なお、1・2・5点目は現地調査により得られた成果である。総じて、今後の京都府では伝統的な面影が残る歴史的な面と国際的な観光都市である面が共存している。また、そこには錦市場の400年継承されてきた“錦流文化”ともいべき経営者意識や井戸水環境への誇りは、おそらく現在まで無くなることなく持ち続けている。町並みや経営者意識など伝統的要素と外国人観光客など新たな要素が共存しているのが錦市場商店街の事例である。今回の調査でも少なからず、外国人観光客の店舗への影響とその受容が随所で見られた。したがって、商業も観光と結びついている事今後の2020年東京五輪に向けた観光施策も、錦市場をはじめとする商店街へ与える経済効果は大きいことが予想される。

一方で、今回の4日間という短期の調査では次に挙げる至らいたいと思われることが露見される。

- ① 4日の短期で一時的なデータになった可能性があり全貌は明らかになっていない
- ② より多くの他の店主への聞き取りおよび来街客へのインタビューなどを行えなかったこと
- ③ 錦市場に関する記念誌、刊行雑誌などを入手できなかった
- ④ 生鮮食品店舗の廃業について（業種転換かどうか）
- ⑤ 外国人観光客の近年増加の要因の検討

以上にあげた点で至らなかったことを自省しつつ、今後の調査に臨みたい。

-付記-

本稿作成にあたり、京都市錦市場商店街振興組合事務局長の是永正之助氏、京都市産業観光局商工部振興課の河村真一氏、山田俊輔氏にお忙しい中にも関わらず、聞き取り調査に快諾いただき対応して頂き大変お世話になりました。併せて、店主の方々にも営業中でお忙しい中にもかかわらず、聞き取り調査にご協力いただきまして誠にありがとうございました。

<参考資料> 最終閲覧日 2017年12月22日

- がんばる商店街77選：京都錦市場商店街, 中小企業庁 (2006)
http://www.chusho.meti.go.jp/shogyo/shogyo/shoutengai77sen/nigiwai/5kinki/1_kinki_20.html
- 京都市 HP -観光・文化・産業・観光-観光調査
<http://www.city.kyoto.lg.jp/menu2/category/22-6-0-0-0-0-0-0-0.html>
- 錦市場 HP
<http://www.kyoto-nishiki.or.jp>
- [PDF] 錦ブランドを活かした地域活性化の取り組み-京都市
<http://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/cmsfiles/contents/0000147/147939/kyotoshoukoujouhou6.pdf>
- 京都商店街連盟京都府商店街振興組合連合会 HP
-商店街マップのご案内 (ホームページリンクや分布図) <http://syouren.or.jp/information/>
- 井村ゼミ (京都産業大学) 錦市場 HP
<https://imurazemi-nisiki.jimdo.com/リンク/>
- パンフレット①錦のご案内(概要)②錦 NISHIKI(店舗) *組合事務所で入手
- ZENRIN, 『ゼンリン住宅地図 京都府京都市中京区』, pp.27-28 (2017/2007/1996)
*1997は入手できず

<参考文献>

- 根田克彦, 大規模商店街の立地を契機とする周辺商業地の変化:釧路市新橋大通商店街を事例に, 東北地理 41-3 pp.148-159(1989)
- 五十嵐篤, 富山市における 中心商業地の構造変化:経営者意識の関連を含めて, 人文地理 48-5 pp.468-481 (1996)
- 近藤暁夫, 大都市中心市街地における伝統的建築物の継承-錦市場の町家を事例として, 立命館地理学 18 pp.69-80(2006)
- 井村直恵, 歴史的商業地区再生の課題-錦市場商店街を事例に-, 京都マネジメント・レビュー-11 pp.33-51(2007)
- 井村直恵, 歴史的商店街の変容についての調査-N 商店街を事例に-, 京都マネジメント・レビュー-15 pp.63-78(2009)
- 井村直恵, 錦市場商店街の活性化と伝統の維持に関する組織形態分析, 京都マネジメント・レビュー-21 pp.45-113(2012)
- 新雅雅史, 『商店街はなぜ滅びるのか 社会・政治・経済史から探る再生の道』582, 光文社新書(2012)